

転移先の異世界はニンゲンの体液が食料!?

冷血エルフのご主人様の食料にされて、

毎日クリトリスを弄られ連続絶頂するうちに

最愛のお嫁さんにされちゃったお話（体験版）

「ほら、何をぐずぐずしているんです、座りなさい」

うう、イヤだあ……。

私は目の前の椅子——ばかーんと足の間が空いている椅子…そう、産婦人科の診察台みたいなソレを見て、しり込みした。

「なんです？ あなたに拒否権があるとしても？ はやく足を開いて、クリトリスをお出しなさい」

ご主人様——そう、この世界に落ちてきた私を拾った冷血な男が、私を冷たく見下ろした。

人間とよく似た姿だけど、耳が少し尖っていて、長い美しい髪は銀色だ。いわゆるエルフという種族なので、顔立ちは怖いくらいに整っていて、職業は魔法の研究…みたいなことをしているらしいけど、他の人との交流がないからよくわからない。

「いいんですか？ このままあなたを外に放り出しても」

その言葉に、私はぶるつ、と震えた。

何の因果か、社畜の私は数日前に道路でコケて、マンホールに落ちて——このおぞましい異世界に来てしまった。

この世界では、人間は狩られつくして、絶滅してしまったらしい。なぜなら

「あなたのような非力で美味しそうな人間のメスが、無防備に外をうろついていたら——あつという間にみぐるみをはがされて、しゃぶられ尽くして骨も残らないでしょうね？」

そう、この世界の生き物にとっては、人間の肉も体液も——すべてが美味なごちそう、らしい。

特に、人間のメスから分泌される絶頂時の愛液は、値段が付かないレベルで貴重なモノだそうだ。

「うう…わかりました……」

そんなところで放りだされたら、たまったものじゃない。

だから、今はとりあえず、このご主人様に従うしかないのだ。

私はしぶしぶ、服を脱いで、屈辱的な椅子に座った。

「ほら、足を開いて台の上に置きなさい。何度言ったらわかるんですか」

ご主人様はいちいち、子どもを叱るように言う。

長く生きているエルフからすると——どこからこう見ても大人な私でも、子ども同然の年齢に見える、らしい。だから基本的に、上から目線だ。

「の、のせ、ました……」

そうすると——強制的に、足を開く形になる。

いやだなあ……。前の世界でも、産婦人科なんてそう何度も行かなかったのに。

「では今日の分の愛液を採取します」

「は、はい……」

ご主人様が、私の開いた足の間に移動する。

うう。好きでやっているわけではないとはいえ、ぱかーんと広げた足の前に彼が立っていると思うと、もう、いたたまれない……。

「何を力を入れているんです。無駄なことはやめなさい。生娘のあなたを絶頂させるには、クリトリスを刺激するのが一番効率が良いんですから」

太ももに手を置かれて、ビクツとなる。

「は、はい、すみません……」

ご主人様が、薄い透明の手袋をする。

うう。嫌だあ……。

また、アレが始まる……。

手袋をした手が足の間に伸びてきて、私はぎゅっと目をつぶった。

「……ッ♡」

「おやおや……」

おまんこの肉襦を、思いきり指先で開かれる。

どうにか隠れていたクリトリスが、ご主人様の目の前にさらされたのがわかった。

「なんですか、このおまんこは。もう濡れているではありませんか」

ご主人様がねちねち嫌味を言う。

「先ほどは椅子に座るのを嫌がっていたくせに——この濡れ具合はどういう事なんでしょうね？」

「そ、それは……っ」

頭では、こんな事、恥ずかしいし、嫌だ。

けれど、あの椅子にすでに何度か座って、指や舌や道具で、あんな恥ずかしいことをされた身体は——

情けないけど、もう、条件反射みたいにな、座ると足の間が疼いてしまう……。

「ええ、ええ、わかりますよ？ 人間のメスは、快感に抗えない。たとえ理性では嫌思っている、ココの快感を、求めてしまいうんでしょう？」

ぶちゅっ、ぬりゅっ。ご主人様がローションみたいなモノを出して、指に塗り付けてる。

そして、むき出しになったクリトリスに、濡れた指を近づける——。

だめ……♡ ひえひえローションのついた手で、そんなとこ、さわられたら……。

前、飛び上がってしまったのを思い出して、身体がすくむ。

「ひ…♡」

「おや、まだ触ってもいないのに……」

バカにしたようにクスクス笑う。

「クリトリスが——固くなってしまうですね？　はあ……本当にあなたは、こらえ性がないんですから」

「ち、ちが……♡」

クリトリスに、触れそうで触れない——そんな距離で焦らされて、望んでいなくても、クリトリスがきゅん♡と切なく疼く。

「何が違うんですか？　クリトリスをこんなにパンパンにさせて——♡」
その瞬間、ぬるぬるの指先でクリトリスを摘ままれる。

「ひゃんッ♡」

突然走った快感に、身体がふるつと震える。

「ほら、ほら、ほら♡」

ご主人様はさらに、指先でクリトリスをやわやわ擦った。

「はッ♡ ああッ♡ やああんッ♡」

「くく……あなたここ、好きですよねえ。クリトリスの上の竿ところ…ほら、すりすりしてあげましょう♡」

欲望でパンパンになってしまったクリ竿をすりすり♡ と擦られる。

「んああッ♡」

ローションでさぞ冷たいかと思ったら——ほどよくご主人様の手指の熱であつたまっついていて、ため息をついてしまいそうなほど、甘い快感が走る。

「んううッ——♡ ひあ♡ んああ♡」

「あーあー、情けない声を出して……♡ そんなに竿、いいですか？ ビクビクしちやって」

もしかして——温まるまで、待ってくれていた？

なんて思っていたら、指の腹を使って、ぬろろッ♡ と、クリトリス全体を撫でおろされる。

「ほら？ これはどうです？」

「んああッ♡ や、やめえッ♡ それえッ♡」

「人間って本当に弱いんですね……♡ 弱点をちよつと擦っただけでコレですから♡ 絶滅したのもわかります…。危ないから、絶対に一人でお外に出ちゃダメですよ？」

こす♡ こす♡ こす♡ こす♡

「ひあああッ♡ んああ♡ ふにやああッ♡」

「赤ちゃんみたいな声、出しちゃって……♡ よわよわヒトメスクリトリスちゃん、そんなに気持ちいいですか？ なら、もつとよちよちしてあげましょう♡」

見下してくるのに、いつも、その指先はじれたいほどに優しくして――

「ほら、よち♡ よち♡」

なでなで、こしよこしよ――赤ん坊をくすぐるみたいに、指先を動かす。

くり♡ くり♡ くり♡ くり♡

「やつ、やらあっ♡ りやめえッ♡ そこしよこしよしたらあっ……♡ も
おお♡」

すると、ご主人様は私を見下ろしていった。

「それじゃあ、何を言いたいのかわかりませんよ？ なにを誰にどうされてダメなのかちゃんとおっしゃい♡ いつも言っているでしょう？」

ご主人様は——やたらと私に、こういう……恥ずかしい事を言うよう指示してくる。これも効率的に愛液を採取するため、と言っているから、恥ずかしい事って思っていないのかもしれないけど……。

「う、うう……」

普通の社畜として生きてきて、男性経験もロクにない私には、ハードルが高すぎる。

「ほらほら、でないとココ、してあげませんよ？」

ご主人様が、クリトリスからふいに指をはなす。

さっきまで甘やかされていたクリトリスは、刺激を求めて、はしたなく、じ

いいん♡ と疼いた。

「言えたら、ご褒美にあなたが好きなやつ、やってあげましょう」

ご主人様が、薄い桃色の唇を、少し開いて——ぺろり、赤くて長い舌の先を、ほんのちよつとのぞかせた。

あ……また、あれ、されちゃうんだ……。そう思うと、私の頭の中は、その桃色で染まって、ぽーっとなってしまっ——。

「っ……ご、ご主人様のっ……指でえ……ッ♡ わ、わたし、のっ、く……くっ、クリトリス……ッ♡ よちよち、しゃれるとっ……気持ちよすぎてえ……♡ しゅ、しゅぐイッちやいそうなるからあ♡ やめて、ほしいのおっ……♡」
ご主人様は冷たい笑みを浮かべた——けど、その白い頬に、赤みが差している。

「よく言えましたね♡ それで、次は私にどうされたいんですか？」

「……っ♡ ご、ご主人様のっ♡ ベロで……っ♡ く、クリトリスと……おまんこの中あっ……♡ くちゅくちゅ、してほしい、れしゅ……♡ おねがい、

しましゅう♡♡」

するとご主人様は、満足そうに笑った。

「ふふ……♡ そんなに頼まれたら、仕方ないですねえ……♡ いいでしょう、やってあげましょう♡」

ご主人様が椅子の前にひざまずいて、ふとももに手を置いて——私のおまんこに、舌を近づける。

「まずはクリトリスから……♡ ご主人様のペロでくちゅくちゅ、してあげますよ」

れろ♡ れろ……♡

エルフ特有の、長い舌の舌先を、柔らかくして——クリトリスの先を、くすぐられる。

「ひゃふっ♡ にゃああんっ♡」

蕩けそうな直接的な快感に、腰が震える。

「ふふ、身体、びくびく震えちゃっていますね……♡ ああ、期待して、ヒトメ

スクリトリスちゃんの玉が、皮の中からびょんって出てきてしまっていますよ♡」

「んあ♡ らめえ……♡ ゆ、ゆわ、ないれえ……♡」

「なぜですか？ 気持ちいから、こんなにピンピンしてしまっているんですよ？

いいことですよ？」

その様子を眺めた後——ご主人さまは、クリトリスの先端に、吸い付いた。

チュッ♡

「きやふツツ♡ はああん♡」

「ん……♡ おいしい……♡ ぷりぷりで、弾力があって……♡」

ちゅっ♡ ちゅっ♡ れろ♡ れろ♡

「ひっ♡ んゅう♡ あううう♡」

「ほんとうに……甘くて……熱くて……♡ 生きたキャンディみたいですね……♡

あなたのクリトリスは……♡」

クリトリスを舐めながら、ご主人様が、うっとりとおぼろげく。

「中毒的です……♡ はあ♡ やみつきになるのもわかります、はあ、はあ……♡ 他の者に舐めさせてはいけませんよ……ッ♡」

「んにゃあ♡♡ ン♡ し、しにゃいれしゅう♡♡」

「ええ、良い子ですね……♡ ちゅ♡」

ちゅ♡♡ ちゅ♡♡ ちゅ♡♡ ちゅ♡♡

夢中になって——ご主人様はそこを舐めている。本当に、飴玉みたいに、舐め溶かして、舌先で転がして——

「あ♡♡ ああ♡♡ そんなに♡♡ しゃれたらあ♡♡ ごしゅじんしゃまあ……ッ♡」

はちきれそうにパンパンになったクリトリスが、じくじくした熱を開放してくて、むずがってる。

「ん？ どうしましたか♡」

「い、いっちゃう♡♡ いっちゃいそうにやのおおッ♡♡」

するとご主人様は、さらにそこに顔をうずめた。

「いいですよ♡ んふ♡ クリトリスたくさんしゃぶってあげますから、情けない顔をして、存分にイッてください♡」

れろれろれろれろれろれろれろれろれろれろ

思い切り、飴玉みたいに転がされて——っ

「んやあああ~~~~~~~~~~~~♡♡!!」

クリトリスから全身に、爆ぜるような快感が広がる。

「んにゃ♡ ふあ、ふは……♡」

イッたあとも、まだそこは敏感で——身体が痙攣してしまう。

「ふふ……びくびくしてますね……♡ でも、おまんこの中がまだですよ♡」

ご主人様は、今度は穴の方をくばあと指で開いた。

ぬちゅ♡

開いただけで、濡れ切ったそこは水音を立てた。

「ああ♡ はしたくないですねえ♡ 未経験の生娘のくせに、こんなに入口を濡

れそぼらせて、男を欲しがっているなんて…♡ あなた本当に、処女なんですか♡？」

恥ずかしさに、頭がかあつと熱くなる。

「そ、そう、ですうっ♡」

「本当にい？ 誰にも触らせたことはありませんか？ こうして、人間のオスに——」

ちよつとその視線が鋭い。罰するみたいに、その舌が、おまんこの入口をくちゅつと割って入ってくる。

「にゃああんっ♡ にゃいれしゅっ…にゃいれしゅうう♡」

「ほんろうに？」

舌が、処女膜を巧みに避けて——にゅぷ、ずちゅ、とナカへと入ってくる。痛みを感じさせない、器用な動き。

「ひっ♡ お、おんッ♡ ごっ♡ こんなとこッ♡ さわった、のおッ♡ ごしゅじんしゃま、だけえ♡ れしゅううっ♡」

「んふ——♡ 信じまふからね♡」

ご褒美みたいに、きゅつと指先でクリトリスを摘ままれながら——舌が、動き始めた。

「んおおッ♡ ほ、お……ッ♡」

じゅぽ、じゅぽ、と長い舌が、何かを探すようにナカをいったりきたりする。クリトリスをいじりながら、じゅぽじゅぽされると、頭の中が真っ白になつて——。

「んおおおおッ♡ らめええ♡ それらめなのおお♡」

「ん……はいはい♡ きもちいいれすねえ♡ あなたのイイところ——たどりつきまひたよ♡」

くっ♡ と、ナカの壁の上の部分——Gスポットを、舌で押される。

「んぎいいッ♡」

「んふ……♡ ココ、ぷっくり膨らんでひましたよ♡」

ぐッ♡ ぐッ♡ ぐッ♡ ぐッ♡

「おふっ♡ んお、おおおッ♡」

自分でも知らなかった悦い部分を、舌で柔らかく押し上げられて、どぶつと奥から愛液が漏れて——ぼたぼた滴る。

「んふ、ふお…♡ すごい♡ あなたのお汁、とっても甘露れす……♡」

ご主人差はがうつとりつぶやいて、愛液を啜りながら、舌を動かす。

ぐッ♡ じゅぽっ♡ ぐッ♡ じゅぽッ♡

くに♡ くに♡ くに♡ くに♡

クリを指先でくすぐられながら、ナカの性感帯をずぼずぼされて——頭の中が、白んでくる。

「いっ♡♡ ンほおおおッ♡」

「あ♡♡ ぎゅゅううッ♡ って私の舌、しめつけて……♡ 処女おまんこ、きつい…♡ いっひゃいそう、れすね？」

私は必死でうなずいた。

「いっひゃうっ♡ 舌ずぼずぼでっ♡ いっひゃうのおお♡ ごしゅじんしゃ

まあっ♡」

「んふ♡ どうぞ♡ 処女なのにい♡ 私の舌でおまんこを奥までじゅぽじゅぽされて♡ ナカイキ♡ しなはい♡」

ぐ~~~~~ッ♡

快感を溜めて膨らみ切ったナカの壁を、思い切り、舌で押されて――

「ほおおおおっ♡ いぐううううッ♡」

全身をビクビクさせて――絶頂が、身体の中を通り過ぎていった。

「んん……はあ……♡」

ご主人様は足の間から顔を離して口元を袖で拭った。

途端にその顔は、冷静で冷たいものに戻っていた。

「今日もかなり採れましたね」

手袋を外し、椅子の下に置いてあったお皿を手に取り、立ち上がって私を見下ろす。

ご主人様はいつも、採取が終わったら元の冷淡な態度に戻ってしまう。

「では、身を清めたあと、身体を休めておきなさい」

疲れて指一本動かせない私は、うなづくことしかできなかった。

「ひゃ、はい……」

【ヒーローside】

椅子の上でぐったり放心している彼女に背を向けて、私は自室へ入って、誰も入ってこれないように鍵を閉めた。

「はあ、はあ……ッ」

ドアにもたれて、はあはあ呼吸する。ローブの下の自分の男性器が、これ以上ないほど固く持ち上がっている。

頭の中と、下半身が熱い。今までの長い人生で、一度もなかったことが——ここ数日は、頻繁に起きている。

（発情……している、のか？　この私が……あんな未熟な、人間ごときに……

ッ)

最初は、ただ珍しい生き物を拾ったから、実験材料に利用しよう、それくらいの気持ちだった。

だが、たしかに文献にある通り、人間の味は、すごかった。

体液は甘く中毒性があり非常に美味だったが、それよりも――。

あの潤んだまなざし、甘い喘ぎ声。

羞恥に震えながらのおねだりも、こちらに身体をすべてを預けてすがってくるような愛らしいしぐさも――。

思い出すと、腰のモノがずくと熱く、重くなる。

(な……ッ！ わ、私は、うんと年下の、未成熟な生き物に欲情するような……ロリコン趣味はない、はず、なのに……！)

趣味どころか、今まで女性というものにたいして、ちっとも興味を抱いたことはなかった。

興味があるのは、幼いころから、魔法薬の研究だけ。けれど没頭すぎて、

家族も、学友たちも——疎遠になっていった。

『あいつは冷血な変わり者』、エルフ社会でそう噂され、今はこの深い森の奥でひとり引きこもり、研究に精を出している。

死ぬまでの、永遠に近い時間をずっと、自分は独りで過ごすのだと思っていた。

だと、いうのに。

（く……ッ、収まらない……！）

自分の男性器は、相変わらず固く勃起したものだった。

（このままでは、生活に差し障る……いたし方ない……ッ）

ベルトを緩め——下衣の中に手を突っ込んで、勃起した男性器を握って上下させる。

「はぁ、く……っ♡」

自分で自分に与える、空しい刺激——。

けれど目を閉じると、さきほどの彼女の姿がありありと浮かぶ。

——妄想が、脳内にあふれ出す。

あの頬に優しく触れて、さらに赤くさせてみたい。

（触れたい……♡ あなたに……ッ♡）

あの小さな唇に、自分の唇を重ね合わせてみたい。

（くちゅくちゅ舌をからめる——♡ 恋人同士がするような、キスを……してみたい♡）

あの体を——思うさま、抱きしめてみたい。

（あのすべらかな胸に、お腹に、首筋に、顔をうずめてみたい……♡）

そして、そのあとは——

（はあ、あ♡ い、挿れたいっ……♡ あなたの、濡れたきつきつのおまんこ

の中に、私のペニスを……♡）

彼女の中に、自分の男性器を思い切り押し込んで、ケダモノみたいに腰を振りとくって、彼女の処女を散らしたい。

ナカで思い切り、何度も何度も、毎日射精して、孕ませて、永遠にずっと、

私のものに――。

「く……出るッ……♡」

とぷッ♡ と、手の中に、粘っこい白い液体があふれる。

――空しい一人遊びが終わった。

手を拭いて、ため息をつく。

「何をやっているんだ、私は……」

熱が冷めると、容赦ない現実が思い出される。

――彼女は仕方なく私を頼っているだけで、好きでここにいるわけではない。

あの愛らしい態度も声も、ただ快感によるもので、私を好いているわけではないのだ。

（別に……っ！ それで、構わない。彼女はただの実験動物――マウスみたいなものなんだから）

こちらだって、別に……可愛いなんて、思っていない。

独り占めして、自分だけのものにしたいなんて、思っていない。

この熱い欲望はただ…。

（当てられただけだ！ あの愛液の、殺人的な甘さに！）

人間なんて、すぐに命が尽きる、ひと夏のセミみたいなもの。

——あんな生き物に本気で入れ込むなんて、ありえない。

再び深いため息をついたその時。

「っ…！」

コンコン、とドアをノックされて、飛び上がる。

「あのー、ご主人様？」

彼女の声だ——

人間の体液が食料の異世界で、冷血エルフに飼われてイカされまくっているうちに、なぜか溺愛ペット扱いされるようになりました（体験版）

制作/冷凍ばいん

発行/2025.11.27

メールアドレス

hona1211jp@yahoo.co.jp